
星暦を駆ける閃光

メロンパン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星暦を駆ける閃光

【Zコード】

Z4523V

【作者名】

メロンパン

【あらすじ】

西暦2050年に衝突した超巨大隕石。調査不可能のこの隕石は衝突による物理的な気象変動だけでなく、人類に「能力」を与える事となる。

第0話 今年度最後の歴史の授業（前書き）

第0話です。序章何でキャラはいませんが、ドンと設定出してあります。

第0話 今年度最後の歴史の授業

「西暦は16年前。丁度君たちが生まれた頃に終わりを告げた。その事は当然知っているね？」

初老の歴史担当の教師は人類なら誰もが知っていることを皮切りに今年度最後の授業を始めた。最後の内容をぴったり年度で収めるこの出来たこの教師は案外スキルが高いのかもしれない。伊達に年は食つてないということだ。

「西暦2050年12月24日に人類起源の地とされるアフリカに超巨大隕石が衝突したんだ。」

そんな事は小さい頃からうざりする程聞いた。テレビも、新聞も、親からも何回も聞いた。

「この日の何日か前に突如隕石の接近が確認されてね。各国の首脳はどうにかできないかと考えた。条約では禁止されていた核弾頭の使用も検討された。協議の末、核弾頭を使うことにしたんだ。それでも隕石は止まらなかつた。そのまま地球に衝突した。その衝撃は日本にまで及んだ。津波、気象変動・・・」

俺は何度も聞いた話をわざわざ聞くのが阿呆らしくて、ノートなんか取っちゃいない。仮に試験に出たとしてもこんなのは常識の範疇だ。誰だって解ける。きっと教師もそれを分かつて話してる。それだけ大事なことなんだ。

「この事は地球危機^{アース・クライシス}と呼ばれるようになつた。さらに地球の環境が変わり人口もこの時極端に減つた。これをこの星に生きる生命とし

て忘れてはいけないと暦じょうみを西暦から星暦、星の暦。としたんだ。」

馳洒落にしか聞こえないが、俺は割と気に入っている。

「そしてその隕石を調べようとするとありえない事態が発生したんだつたな」

ここから何の話をするのか容易に想像はついた。俺が最も聞きたくない話だ。

「隕石には金粉の様なものが付いてたんだが・・・誰も隕石に触ることは愚か、一定範囲に近づくことすら不可能だった。そしてその頃人類に変化が訪れた・・・君たちも感じているだろう。実際に使っている生徒も多いだろう。そう「能力」が使えるようになったんだ。人類は」

予想通り過ぎて笑いそうになる。そうだ。人類は過去の時代では超能力だと、特撮のようなことが出来るようになつた。種類は様々で笑えるものから物騒なものまでたくさんある。小さい頃見たテレビでは飛行機と同じ高度で空を飛んでるおっさんとか、マグロと泳ぎで張り合う女とか。

「その人類の急速な変化に対応するために人類はこれまでの国連つまり国際連盟から国際能力連盟、呼び方は国連だと国能連とか様々だ。ここでは日夜科学者が能力に関しての研究を行つてゐる。来年一年生になる君たちはこれからより詳しく能力について学んでいくことになるだろう。」

分かつっていたことだが、俺はうんざりする。能力のことなんか学びたくもない。そもそも俺にそんなものを学ぶ必要はない。

「さて、今日の。いや今年度の社会科の授業を終わりにしよう。春休みは短いが有意義に過ごしてくれ。それでは、解散。」

授業に終わりが告げられると俺は早々に教室を出た。

第0話 今年度最後の歴史の授業（後書き）

第0話読んでくださってありがとうございます。あらすじが適當なのは本編よりあらすじが進んでいたと、萎えちゃうかなーと思つたからです。ネタバレを避けようとするとかなり簡素になつてしましました。本編が進むに連れあらすじも書き足していきたいと思います。お陰で前書きもかなりあつたりです。手を抜いたんじやありません。こいつ手の話は設定が多いのでしばらくは設定の説明に追われる気がします・・・それでも付いてくれると嬉しいです・・・

第1話 2年生になつて（前書き）

前のから1ヶ月以上空いてしまいました・・・何やつてたんだって
いつ話ですよね・・・これからは頑張りますから・・・！

第1話 2年生になつて

「今日で春休みも終わりかよ・・・あと100日はあつてもいいだら・・・」

俺はそんな事を呟きながら寮を出た。残念ながら今日から新年度、つまり俺は高2になつたということだ。ここは全寮制だから電車に乗り遅れて遅刻――なんてことほまさず無い。しょうがなく俺は寮を出て学校へ向かうこととした。

「お早う、紘輝。今年も同じクラスになれたらしいね」

「よ、蓮火。俺はお前とじゃなくともいいけどな」

まさしくメガネ君というあだ名が相応しいこれが俺の唯一の親友、赤石蓮火あかしれんかだ。この学園の同学年で最も強い（・・・。

「そんなこと言わないでくれよ、やつぱり君は雪姫と一緒になら僕はどうでもいいってことかい？」

「げ、雪姫とだけは嫌だぞ俺は・・・・」

「ねえ、紘輝。誰と一緒に嫌ですつて・・・・？」

「お、噂をすれば・・・お早う、雪姫。紘輝が雪姫とは同じクラスになりたくないんだとね~」

「お早う御座います。雪姫さん・・・今日は良てお田柄で・・・・」

不味い。雪姫を怒らせたらこの辺が本当に凍りつく・・・」
「いつだ
つて学園の同学年でトップに入つてもおかしくない強さを持つて
いるのだから・・・

「そうだね、紘輝。それで紘輝は私と同じクラスは嫌なのかな?か
なかな?」

「いや!？そんな事は有りませんよ?いやー雪姫と蓮火と同じ
クラスならいいのにな――」

「相変わらず仲がいいね、一人とも。こうして見ると夫婦漫才みたい
で面白いよ」

「何言つてんだよ、メガネ・・・なあ雪姫?」

「そうだよ・・・夫婦なんて・・・やつぱりそつ見えぢやう?」

俺ら3人は俗にいう幼馴染だ。蓮火は学年最強、雪姫は学年トップ
クラスの力と理事長の娘という力で一人とも最底辺の俺を守つてくれ
れている。

「僕をメガネつて言つたら・・・燃やすつて言つたよね?」

「冗談だつて、蓮火。お前の場合は本気で燃えるから困るんだよ・・・

「やだ、紘輝・・・私に萌えるなんてそんな大声で言わなくとも・・・

・

「言つてねえよ、雪姫!」

「隠さないでいいよ、紘輝。さあ私の胸にいで？」

「いやー朝からいいものを見たよ、それじゃお先に～」

「ちょ、待てよ蓮火！」

俺たちが通うこの学校は人類が会得した未知の力「能力」を研究し、正しく使役できる者「能力者」を育成するために作られた世界最初の学校で国からも莫大な予算が出てる。そしてその理事長の娘こそがあの雪姫、氷乃雪姫こおりのゆきひめである。そんな学校に通うのだから普通生徒は能力者のみで構成される。例えば蓮火は空気中の酸素を自在に燃焼させることで火を生み出す。この戦闘力が学年最強なのである、逆に雪姫は空気中の水分を凍らせてことで氷を生み出す。この力も学年トップクラスである。俺とは違う、本当に誇れる友人だ。

「お、やつときたね二人とも。僕達3人はずっと同じクラスにある運命のようだ」

「やつたね、紘輝！蓮火もまた一年ようしく…」

「蓮火、雪姫。ホントまた世話になるは…」

この学校、いや全世界で唯一人10歳を超えて能力の使えない「無能力者」の面倒を見てくれるなんて…感謝するしかないよ。

第1話 2年生になつて（後書き）

何でこんなに遅くなつてしまつたかといつとですね、後半の話は大体考えたのですが・・・そこにたどり着くまで・・・まさしくこれら辺の話が全く浮かばないわけです・・・！1話でつまづきましたよ・・・何とかこつから頑張ります・・・

というか・・・今回の話・・・「ばつか使ってますね。

しかも、途中でオチがわかつちゃいますね・・・

第2話 必修科目 能力科（前書き）

ほんと・・・更新遅れすぎですね・・・」ここまで（たった2回分）見てくれた方には本当に申し訳ないです。暖かすぎる田で見てくれる嬉しくですね。

第2話 必修科目 能力科

この学園は突如人類が操ることが出来るようになった「能力」の研究の為に設立されただけあって、2年からは能力科と言う世界中何処を探しても無い科目がある。しかし教えるといつても分からぬことばかりの「能力」については教師だつて探し探りだ。だから研究員に生徒も使って少しでも早くこの謎の力について解明したいと いう国、世界の思惑がある。今は「能力」についての座学だ。

「「能力」とはあくまで人間の個性として基本的に一人につき一つが与えられる。これがどのような理由によって与えられているかは不明である。尚、あくまで基本的であつて中には二つ、三つほど与えられている人間もいるかもしれないが、それらは全て調査中である。」

結局は何もかも分からずじまいだ。そして俺は思う。この「能力」の解説は人智を超えたところにあるのだと。そこにたどり着いてしまえば、人類は一段階上の生物になってしまふのではないかと。

「この力の発生にはカロリーを消費する事がわかつてている。つまりは運動と同じだ。長時間の使用は体力を激しく消耗し健康に害が出る可能性があるから、気をつけるように」

大体「能力」が使えない俺にはこんな話は聞く必要がない。必修科目とは言えサボつたつてどうにかなるだろう。

「おい、藤原。何処へ行く気だ？」

担当教師が後ろから俺を止めようと声をかける。サボるのもこれで

何回目かだから今更止められるとも思つてなかつたがしじうがなく俺は対応することにした。

「すいません、先生一腹痛いんでトイレ行つてきますー」

俺は適当に答えて手を振りながら教室を出よつとしたその時後ろから圧力を感じて——

「貴様・・・勝手に教室を抜けるなんて俺が許さねえぞ?」

右手で俺の肩を掴まれた。この時代に教師が直接的な手段を用いて生徒を指導しようとするのは珍しい。星歴じやなくて西暦時代にはよくあつたことじうしいけど。ドラマでやつてたし。

「皆、丁度いいから俺の能力を見せてやるわ・・・」この「無能力者」にな!

瞬間、少なからず教室の空気が変わつた気がした。俺は確かに能力は使えないがそれは陰で言つことはあつても表では言つてはいけないわば、タブーだ。それをあらうとか教師が言つたとなれば元々張り詰めていた空気はさらに緊張感を持つのは当然であった。

「右腕強化」

短く発声した教師の右腕には大きな変化が発声した。元々筋肉質だった体から更に人間がどんなトレーニングをしても到達不可能なほどの力瘤が隆起し右腕全体が樹齢1000年を超す樹の幹のように圧倒的存在感を放つ「凶器」となつた。

「ククク・・・落ちこぼれの(無能力者)に俺の攻撃をかわす術は

無いよなあ？残念だつたな落ちこぼれ君、お前は今から俺のサンドバックとなる！！」

男は巨大化した腕を引き正拳突きの構えを取る。そして俺の体は危機を感じ汗を噴かせ動こうと思つても体が固まる。息が詰まる。その時人事だった「死」が自分のすぐ隣りにいるのを感じた。

「さて、何処まで吹つ飛ぶのかな？せいぜいいい声出せよ！――！」

空気を切り裂いて弾丸と化した腕が飛んでくる――

「先生悪いですがもう終業の鐘が鳴つてますよ？続きはまた今度ですね。」

男の右腕は発火していた。ありえない現象に俺の思考が追いつかない、一体何故？

「大変だつたね、紜輝。授業の例に使われるなんて。でもチャイム鳴つたから水でも飲んでこよう」「

その時ようやく何があきたのかに気がついた。俺が殴られる瞬間――蓮火の「火炎」かえんによってアイツの手が発火したのだ。

「能力どうしが衝突した場合基本的に能力強度が強いほうが打ち勝つんですね？よく分かりましたよ、それでは今日はもうお終いですよね」

蓮火が右手を握り締めると火は一瞬にして鎮火した。しかしそこには熱にやられ真っ赤に腫れ上がった腕を押される男の姿があつた。

「火傷ですか？無理なさらないでくださいね？」

そう言い残し蓮火は俺を連れて教室を後にした。しかし遅れて出了
俺には聞こえたんだ。奴の呪詛、恨みの籠った声が。

「必ず・・・殺してやる・・・俺の手で・・・殴り倒してヤル・・・」

この時は退屈な日々が少し変わった、それだけだと思つてた。でも
除け者扱いされていた日々はある日突然終りを告げ守られ続ける生
活は一変していく事なんか俺には気づけなかつた――

第2話 必修科目 能力科（後書き）

久しぶりに更新したと思ったらこのザマですよー急展開とかの騒ぎじゃないですね。展開云々より教師が生徒殴る宣言しちゃいましたよー僕もびっくりです。教師じゃなくて生徒に殴らせれば良かったかな・・・

実は今回の話は前後編構成ですーなんと後編はこの後すぐー・・・書き始める予定です・・・

第3話 発現（前書き）

すこません・・・昨日のあとがき的に更新は昨日か今日の深夜にすべきですよね・・・だれかこんな作者を許してやってください・・・

第3話 発現

「大丈夫だつたかい？ 紘輝」

教師に全力で殴られかけ、それを友人に助けてもらうという波乱の授業を終え俺は蓮火と二人で水を飲んでいた。

教師の正拳突きは蓮火の「能力」——体の何処かから火を発火させ
火球やブレスのように撃ち出す事が出来る力「火炎」によって止め
られた。

「授業でアイツが言つていたように能力どうしがぶつかつた場合は能力強度というそれぞれの能力が持つてゐる強さによつて勝敗が決る。さつきの場合は僕の「火炎」がアイツの「右腕強化」を上回つたから右腕に着火できたんだ。」

それは分かる。しかし俺が思つことはそれとは違つことだ。

「よく教師の能力強度を上回つたな・・・本当に前は凄いよ」

「正直五分五分だと思つてたんだけどね。上回つちゃつたよ、でも仮に僕が止められなくて雪姫がアイツの右腕を氷漬けにしてくれてたと思つよ？」

「本当に・・・お前ら一人には感謝してるよ、何時見捨てたつてい
いんだぞ?」

「嫌だな、僕も雪姫も紜輝を見捨てる事なんてしないよ。ずっと3人親友としてお互い助けあって生きていくって、もう決めたからね。それより・・・」

そこで蓮火は言葉を切り、一段低い口調で喋り始めた。

「気を付けたほうがいいよ。今までになくこの学園が、世界が君を排除しようとしている気がするんだ・・・いままであの教員だってあそこまで怒る事はなかつた。ましてや能力を使ってまでサボるのを止めようとするなんて以外だ。それでもやろうとしたという事は・・・きっと何かが変わる。それは君が変わらぬのか君の周りの世界かはわからない。でも、例え世界が変わつても僕と雪姫は最後までそばにいるよ」

「忠告ありがと・・・それと最後の言葉は旧暦からずつと使われるテンプレだぞ?」

親友の助言に恥ずかしくなつた俺はそう言ひつと学園を後にして寮に向かつた。

「行けね・・・色々足りないものがあるな・・・買ってこねえと・・・」

夜。部屋で一人でいた俺は思い立つて部屋を出る。当然ルームメイトは蓮火だ。話によると若干の根回しもしたらしい。俺は学生手帳を取り出し校門にタッチした。すると一瞬の電子音の後にロックは解除され俺は外に出た。学生手帳にはECCチップが内蔵されていて校門に触れることで何時に外に出たか又GPS機能により何処にい

るか分かるため、門限というものは基本的に世界から排除された。

「さて・・・寒いし蓮火も心配すっから早く帰らねえとな・・・」

蓮火が心配する理由は単純で深夜は不良なんかに襲われれば能力が使えない上に身体能力も並程度の紳輝には勝ち目がないからである。やはりそういう奴には好戦的な能力がつきやすいのか何度も絡めたことがある。その度に火やら氷やらが飛んできて助かつてるので。

「裏路地の方が早く帰れるな・・・いくら俺でも襲われねえだろ・・・」

・

そう思つて俺は裏路地を駆け足で走る。どの時代も裏路地は寂れていって薄意味悪い。そして・・・走る先に人影を見た。

「やあ？『無能力者』君？こんな遅い時間に外に出たら危ないだろ？早く戻りたまえ」

「そんな・・・何で俺の位置が特定できたんだよ・・・？」

「簡単なことさ、君たち生徒が外出する際の記録はコンピューターに残る。そしてこの学園の教員は全ての生徒が何処にいるかを把握するアクセス権限を持っているのだよー」

確かにそれなら合点がいく。しかしづざわざ俺が外出するのを待つてそれでいて待ち伏せまでする必要があるのでどうか。

「部屋には優秀なボディーガードがどつから出でてくるか分からしないなあ？学園内も同様だ・・・だが今ならお前を気が済むまでぶん殴れるぜ・・・！」

「何で急に俺を狙い始めた？前までは普通の先生だったのに……」

「俺にはお前らと同じ年の娘がいてな……俺の『右腕強化』⁽¹⁾と
き軽く超えるいい能力を持つていた。それでいて『能力』という未
知なるものへの探究心も旺盛だった……だからこの学園を受験し
たんだ。だが落ちた！何でか分かるか！『無能力者』を秀才一人が
強引にねじ込んだせいだ！お前さえいなければ娘はこの最高の設備
で花開いたというのに……だから俺は『無能力者』を探した……
娘の為にな……そして見つけた今……お前を俺がぶち殺す……
それが未来を断たれた娘への報いだ！死んで償え……この落ちこ
ぼれが！『右腕強化！……』」

確かに俺が受かつて能力を持つものが落ちたのは理不尽かもしれない。
だが落ちたのは彼女一人ではないし、それは人を殺す理由に値
しない。でも——本当にそうなのだろうか？俺がいなければ彼女は
受かりこの男も幸せに暮らせたかも知れない。いやこの男の恨みは
きっと他の能力がありながら落ちていった者たち全員の恨みを背負
つているような気もした。そして男がその右腕を構えて迫る——

「死ね！死んで娘の未来を償え！この落ちこぼれがあアア――！」

今度こそ助からない。本能が告げた。そして、俺はそれを受け入れ
ようとした。しううが無いと。自分が悪いのだと。才能がないのに
周りの力だけで生きてきたのだから。そして男が迫る事に時間は長
く感じた。蓮火。雪姫。やっぱり無理だったよ。今まで助けてくれ
て有難う——彼は運命を受け入れた。

「……それでいいのか？お前は此處で無様に死ぬのか？何も成し
遂げられず。只周りから哀れみの目を向けられるだけ。そんな人生

をそのまま終わらせていいのか？」

「私は人ではない・・・お前に足りないもの全てだ・・・つまり力・そのもの・・・我を欲すか？望むならば掴め。ここで死ぬの人生。選べ・・・周りに決められ続けた人生を脱せ・・・」

「俺には・・・生きる価値は無いかもしれない・・・でも、それで
も！まだ死にたくないんだ！！」

瞬間。脳裏に様々な画が浮かんだ。そして全てが消えて最後に視界が白で埋め尽くされた時。

——雷が鳴り響いた。

第3話 発現（後書き）

急展開もびっくりなジエットコースターな動きを見せてあります。もうわいわいですね。作者以外テンションについてこれなくて読む気無くなるんじゃないでしょうか・・・。
しかもここで終わり・・・いや、もうちょい伸ばすと終わりビックロが難しいので、この辺で・・・決して疲れたとかじゃないんですよ？
それにもしても主人公意思が弱いですよね。殴られるの受け入れますからね。Mなのかもしれません。

そんなこんなでこれからも応援よろしくお願いします・・・！

第4話 閃電（前書き）

書くとこいつてから2・3日経ってしまいました・・・これは書く書く詐欺です。大体僕の更新宣言は2、3日遅れると思つていただければいいんぢやないでしょうか。言つて最低な気がしてきました・・・

そしてこの話タイトルさえ見れば8割分かる気がしますね。なんかこの味のあるタイトル付けたいですね・・・

第4話 閃電

「何だ・・・これは・・・雷いかづち・・・?」

彼が自分で呟いたように紘輝の左腕から光——雷が迸つていた。そしてその閃光はアイツの強化された右腕を吹き飛ばしていた。

「ぐあつ！何で・・・貴様に能力が使える……そして・・・俺の力を上回るだと・・・?」

右腕が消し飛んだ男はそれでも尚紘輝に憎悪をぶつける。

「おまえ！隠していたのか！？有り得ん！（無能力者）の筈なのに・・・殺してやる！娘と消し飛ばされた右腕の恨みを纏めて・・・晴らしてやる——」

前かがみになりながら不気味に接近してくる教師。しかしこれはもう人間と言うべき存在に見える。

「そんな・・・もう引いてください！これ以上は・・・命の保証はできない！」

「知るかそんなもの！俺の命なんて関係ない！！俺と家族の人生を壊しやがって――！」

男はふらふらとした足取りで俺に近づいてくる。そして俺の左腕は尚も閃光を迸らせている。

「死ね、死ねえ、死んでしまええ――！」

男はポケットから無造作に獲物——ナイフを抜き出した。

「くそつ！これ以上は……命の保証は出来ない！！」

俺が無意識にナイフの動きに左手を合わせた瞬間に。ナイフは砕け。倒れかかる顔に。光が当たり。

顔を消し飛ばした。

「俺が……人を殺した？俺に……能力が使えた？」

左手が小刻みに震える。そして一際甲高い音を上げた後、光が広がり消えていった。

「見つけた……強き能力者を……貴方には資格がある……^{あう}王となる為の……^{りく}」

気づいたときには後ろに一人の少女がいた。

そしてこの瞬間から。俺は守られる人生を捨て。人のために生きる事になる。

第4話 閃電（後書き）

書いてて思いました。今回は酷いです。半端じゃないです。

書いてていつも満足できなことは初めてです。気づいたときには
駄文書いてしまいました。

また終わり適当ですし・・・何かいつ勢い任せなのがバレバレです
よね。

- ・ こんなんで完結出来るんですかね・・・打ち切つて合つかうです・・・

第5話 六王（前書き）

「んにちは、お久しぶりです
酷い文章の連続で5話まで来てしましたね・・・
そろそろ一発会心の一撃！みたいなの出ればいいなー
努力しなきゃな・・・」

第5話 六王

俺が能力を発動したあの夜から数日が経ち、俺は蓮火に呼び出され学校の空き教室へと向かった。

「どうした？」んな所に呼び出して

「聞いてくれ、紘輝。君に話さなければいけないことがある。」

「何だよ、改まって能力の事か？あれならあの日以降出せなくなつちまつた。悪いな」

それでも蓮火は緊張した面持ちで俺に告げた。

「君は、六王に選ばれたんだ。」

六王？そんなものは聞いたことがない。蓮火にしては質の悪い冗談だった。

「何だ蓮火？新しい遊びでも考えたのか？」

「違う、これは本気だよ紘輝。能力者が集まるこの学園から能力強度、能力の優位性、価値によって選出されることとなつていた六人の能力者一六王だ」

「嘘だろ・・・そんなものに何で俺が・・・？」

「あの時君が出した雷はこの学園全生徒の能力の能力強度を上回っていたんだ。つまり君の左腕に触れられた能力はこの学園では役に

立たず破壊されてしまう。そしてあの腕には殺傷能力があるからそのまま殺せる。つまり戦い方にもよるけど君は純粹な力勝負なら最強なんだ。これは一僕や雪姫はあるか世界中でも通用するだろ？ね・・・

「でも！俺はあの日から能力は出せないんだぞ？」

「今までに一度発現した能力が消えたという事例はないよ。そもそも君は能力に目覚めたのがつい先日なのだから無理は無いね。きっとその内君はあの力を思うがままに操れる時が来るだろ？ね・・・」

「その・・・六王って・・・他に誰がいるんだ・・・？」

「一応決まっているらしいけど、僕が知っているのは雪姫だけだよ。僕も黙っていたけど君が無能力者なのにこの学園に入れたのは僕と雪姫が六王となり闘うといふことも条件だったんだ。隠しててごめんね？」

「嘘だろ・・・一人がなんで・・・闘つって・・・？」

あまりに急な出来事に言葉が続かない。尚も蓮火は続けて言う。

「僕達の仕事の一つに世界が対処できない犯罪者を裁くということも含まれている。警察にも当然能力者がいるけど犯罪者が能力者で強い対人性能であつたり、隠れるのに向いている能力者を捕まえる警察は少ないだろうね・・・だからそういう相手には僕らの出番つて事さ。当然僕の能力は『火炎』だけだから人探しには向いてないけどちゃんと非戦闘の能力者もいるらしいよ。他にどんな能力者がいるのか全く分からぬけどね」

「そんなの・・・俺には無理だ！出来っこない！こんな不安定な能力で・・・犯罪者と戦えだつて！？無茶言うなよ！一人が俺のせいでも六王にされたのは謝る！だけど、俺には無理だ・・戦えないよ・・・」

「残念だけど、君に六王を拒否する権利はないよ

「きつぱりと蓮火に言われた。ここまで強く否定されたのは長い付き合い初めてかもしれない。

「どうして！？俺にだつてそのぐらいの権利はあるだろ！否応なしに巻き込むなよ！」

「そうじゃない。君はすでに・・・人を殺してしまっている。」

「つ・・・！それが何だよ・・・」

「確かに君の戦闘は防衛だつたんだろう。でも普通に考えて守る筈だつたのにいきなり出てきた能力が強すぎてそのまま相手を殺してしまった何て言われて信じる人は少ないと思うよ？司法だつて能力に関する裁定はぜんぜん決まっていないんだ。」

「それと・・・六王に何の関係があるんだよ・・・？」

「さつき言ったよね？王は人を殺すのが仕事の一つだつて。それで捕まつてたら仕事は成り立たないよね？」

「まさか・・・六王には・・・人を殺す権利があるといつか？」

「簡単に言えばそうなるね。上の命令によつて支持されたターゲッ

トは・・・殺しても捕まらない。」

流石に蓮火ですら言い淀んだ。でもそんなのおかし過ぎる。大体俺
は・・・

「王になる前に殺したんだぞ？しかもターゲット前の…どうするん
だよ…？意味ないだろ…！」

「落ち着いてくれ紘輝！上はこう言った。君が六王の一員として闘
うのであればこの一件は無かつたことになると」

「信じられるか！良いよつに使つて見殺しにする気なんだろ！答え
ろ蓮火！」

思わず蓮火の服を掴んで引き寄せてしまう。それでも蓮火は話を止
めない。

「――！信じる材料は君自身だよ。君が今いる此処。それこそが彼
等を信頼できる材料なんだ。僕らは彼等に命を預ける。代わりに彼
等は殆どの声を聞き入れてくれる筈だ。」

「だからって・・・だからって…！皆好き勝手なんだよ！能力が使
えないだけでいじめられて！能力が使えるようになつたら今度はよ
く分からんメンバーになつて人殺しそうって…？ふざけるなよ…
！」

「君の言うことも分かる！でも、もし断れば…僕は今度こそ君
の安全を守れないかもしない！それは雪姫もだ！この学校にいれ
ば僕らは必ず君を護り続ける！だから、受けてくれ紘輝！」

瞬間。俺の中で何かが弾けた。

「いつもいつも・・・守つてやる守つてやるつて・・・ウンザリなんだよ・・・俺はそんなに弱い人間じゃねえ。一人で体ぐらい守れるわ・・・俺は！お前や雪姫のおもちゃじやないんだよっ！！」

蓮火を掴んでいた両手を離して、左手を目の前に置き、右手は脱力。そして何処からか湧いてくる無限の破壊衝動に身を任せ・・・

「紘輝！左手を下げるー！」んな所でそんな強大な能力を使うな！

彼の左手からは、あの時の蒼白く、気高く、雄々しき、閃電が輝いた。

「強大つて言つたな・・・ならもうお前等のお節介は必要ないよな！？蓮火・・・お前を殺したつてさ・・・追手も全員この左腕で吹き飛ばせばいいんだろ・・・？言つてくれたよな？世界でも通用するつて！さよならだ・・・蓮火！！」

彼は蓮火に向けて走りだした。そして左腕を突き出し・・・

「確かに君のそれは強い。らしいね。僕は君と直接力勝負したこと無いから分からぬいや。いいよ来なよ・・・僕の力、忘れたわけじゃないよね？」

蓮火も右腕を「火炎」によつて燃やすことで「閃電」に対抗する。

この時。初めて二人は全てを吐き出しながらお互いの想いをぶつけ
る。

第5話 六王（後書き）

個人的には前よりはマシに書けたと思います・・・でも話ばっかで一切状況説明とか入れてないですよね。でも会話の途中で説明入れるのって難しくないですか？僕だけですかね・・・

主人公は完全にグレてますよね。近年よく見る周りに反抗して取り敢えずキレる主人公です。最初から完成された主人公は見ててどうしようもないのに欠陥を持たせることが多いですが、こいつ欠陥だらけですよね。襲われて死んでもいいやの状態から相手を倒し、友人の説明に逆ギレして殺そうとしてます。ある意味こいつ病んでますね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4523v/>

星曆を駆ける閃光

2011年11月5日21時07分発行